◇前号訂正◇

・（目次）60：森本英夫⇨59：森本英夫

・62頁と63頁の内容が逆

○執筆者一覧○

安生　恭子	*ANJô Yasuko*	(大阪府立大学)
岩本　篤子	*IWAMOTO Atsuko*	(大阪市立大学非常勤講師)
岡崎　有里	*OKAZAKI Yuri*	(大阪市立大学学部卒)
小倉　博史	*OGURA Hiroshi*	(京都外国語大学)
小栗栖　等	*OGURISU Hitoshi*	(大阪市立大学後期博士課程)
川口　陽子	*KAWAGUCHI Yôko*	(神戸大学博士課程)
傳田久仁子	*DENDA Kuniko*	(大阪市立大学後期博士課程)
土井　隆広	*DOï Takahiro*	(関西学院大学後期博士課程)
福島　祥行	*FUKUSHIMA Yoshiyuki*	(大阪市立大学後期博士課程)
舟杉　真一	*FUNASUGI Shin'ichi*	(京都外国語大学)
森本　英夫	*MORIMOTO Hidéo*	(大阪市立大学)

T.L.L.M.F.　第2号

発　行 ―――――― 1991年5月13日

発行所 ――― 大阪市立大学文学研究科

森本研究室

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138

[06-605-2455]

印　刷 ―――――― アルプス印刷

[06-691-0558]

Travaux de Linguistique et Littérature Médiévale Françaises

目　次

1：森本　英夫◆岸本通夫先生を偲ぶ

7：小栗栖　等●武勲詩の起源問題に関する諸主張
——その2：Paul AebischerとMenéndez Pidalの主張を通って——

13：傳田久仁子●水の精の系譜における MELUSINE

19：川口　陽子●ムルドゥマレックという名

27：福島　祥行●《Elle aime les chats, mais lui, il aime le koala.》
——*LES* générique と *LE* générique の認識構造的差異——

34：岡崎　有里●代名詞 "on" について

40：土井　隆広●"ON"の使用と主体の了解

46：安生　恭子●VENIRと敬意表現——話し手が動作主の場合——

52：舟杉　真一●現代フランス語における少数語尾語

57：岩本　篤子●Estreの２つの直説法半過去形

63：小倉　博史●固有名詞による成句について(2)——聖書より——

68：森本　英夫●Ｑｕｉ－Ｘ－ＶとＱｕｉ－Ｖ－Ｘ

1991.5

武勲詩の起源問題に関する諸主張

——その２：Paul AebischerとMenéndez Pidalの主張を巡って——

小栗栖　等

Ⅰ．本稿の目的及び対象——Pidal とAebischer の論文——について

本稿の主たる目的は二つある。その一つは前回の結論部分に用いた「美学的判断」という概念を説明すること、もう一つは「一貫性」の概念と武勲詩の起源問題の関わりを説明することである。この二つの目的は独立したものではなく、密接に絡み合っている。「『ロランの歌』と〈一貫性〉の神話」で、「一貫性」の神話と『ロランの歌』（以下『ロラン』）の解釈との関わりを述べたが、この神話は実のところ、武勲詩の起源を扱う多くの言説の中では「美学的判断」という形で現れて来るのである。つまるところ、本稿が武勲詩の起源問題の解決を目指すものではなく、寧ろその解決不可能性を、起源問題を巡る諸言説を検討することで示そうとするものであることを明記しておかねばならない[1]。

次に、本稿が主に考察の対象とするのは、Ramón Menéndez Pidalの *La Chanson de Roland et la Tradition Epique des Francs* (traduction française d'I. Cluzel, A. et Picard, Paris, 1960)（以下『叙事詩伝承』と略する）とPaul Aebischer の *Préhistoire et protohistoire du Roland d'Oxford* (Romanica, Berne, 1972)（以下『先史と原史』と略す）である[2]。

最後に、両論文の特徴を概観しておこう。両者に共通するのはアラブ語史料を含めた極めて広範な史料に基づいて多方面から問題を検討していることである。そのために双方の論を展開する場は比較的均質である。但し、 Pidalが言語学的知識を活用するのに対して、 Aebischerは北欧の写本を援用するという差異に加えて、後者は前者への反論を意識的に行っており、そのために史料に対するその検討は一層精緻の度合いをましている部分がある[3]。しかしながら、 Pidalの論の展開がAebischer に劣ったものとなっているということは決してない。

Ⅱ．両論文における歴史事実、諸写本の検討

両論文の対立点で重要であるのは以下の三つである。即ち、歴史事実の検討、2)『ロラン』の古態を示すと思われる諸史料の検討、3) O本（ｵｯｸｽﾌｫｰﾄﾞ本）『ロラン』の起源である。以下この順番に従って対立を大まかに検討することとする。

1)歴史事実の検討――Wasconesの襲撃と、サラセン人の襲撃：周知の通り、『ロラン』は、778年に起こったシャルルマーニュの殿軍の全滅（ロンスヴォーの事件）という史実に基づいているとされているが、その事件の全容は未だ明瞭ではない。この史実の解明において、Pidalと Aebischerの対立の一つを見ることができる。『叙事詩伝承』は、《Vita Karoli Magni Imperatoris》(830年頃)(以下『大帝伝』と略す）と《Annales Royales, jusqu'en 829: l'année 778》(以下『年代記』）に襲撃者として報告されているWasconesを従来通りバスク人と見做す。ところでアラビア史料は、シャルルに囚えられたシュレイマン・イブン・アル・アラビが、その二人の息子により奪還されたことを報告している。 Pidalはこの奪還とバスクの襲撃が同一のものであったとし、襲撃はサラセン人の主導によるものであったが、フランク史料は意図的に、即ち政治的配慮からその記載を避けたのだとしている。

一方、AebischerはWasconesをガスコン人と見做し、『大帝伝』等に報告されているのは国家的規模の反乱であったと推定する。そして、サラセン人の襲撃は人質の奪回だけを目的とした小規模なものであったとしている。 Pidalは短期間に二度もの襲撃を受けたとすれば、シャルルマーニュは余程の迂闊者だったということになると述べているが、 Aebischerはガスコン人の反乱に蒼惶としてフランク領内へ引き返すシャルルマーニュがサラセン人による人質の奪回などという瑣事に関わる余裕を持ち得なかった可能性は十分にあると反論している[4]。

2)諸史料の検討――『ロラン』の l'état latentについて：両論文はともにO本以前にロンスヴォーの事件に言及している史書等を詳細に検討している。
Pidal は、「事件」直後に創出され失われてしまった「時事詩<chant actuel>」にO本が基づいていることを主張して、残された諸史料にその痕跡を探し求める。Aebischer はそれに対して様々の反論を試みているが、その論理には極めて恣意的な部分がある。とはいえ、Pidalの論理が恣意的でないというわけでもない。

例えば、Pidalは『大帝伝』の記述が極めて詩的であることを以下の根拠に従って主張する。

a)最も短期間のものであったスペイン遠征に最も長い記述を行っていること　b)スペイン遠征に関する他の如何なる事件（イスパニア・マルクの建設など）よりもロンスヴォーに固執していること　c)他の部分が『年代記』の要約であるのに、件の事件に関してのみは『年代記』より長い記述を行っていること　d)記述の殆どが戦闘に関するものであること　e)例外的に犠牲者への言及がなされていること。

ところで『大帝伝』の写本には二つの系統がある。その一つ(A系）はロンスヴォーの犠牲者として三名を挙げており、その中に Hruodlandusの名がある。一方、もう一つ(B系）の方は、その名には言及しない。そして後者の方が前者よりも古態で

あるとされているのだが、 Pidalは、伝承詩により余りにも周知のものとなったので、著者Eginhard自身の手によって Hruodlandusの名が加えられたと主張する[5]。

これに対して、 Aebischerは M. de Mandachの説を援用して、A系の写本が12世紀に改竄された祖本の流れをくむ可能性があるとして、ロランという名の人物の実在を『大帝伝』が証明しえないことを主張するものの、先の Pidalの所説に完全な反論を加え得ない[6]。

また「事件」の60年後に成立したとされる、L'Astronome limousinの史書は、ロンスヴォーの事件に言及したあと、《quorum nomina, quia vulgata sunt, dicere supersedi》「（死者の）名は良く知られているので、それに言及するのは止めておこう」と書いている。

筆者が『大帝伝』を念頭に置いていたにせよ、一冊の史書の内容が多くは文盲である人々の知るところとなり得るとは考えにくい。更に、土地と密接に結び付いた民間伝承による伝播も範囲が限られる。つまり、広範囲に特定の固有名詞が伝わるには変形を被りにくい伝承詩が必要である。以上のように Pidalは主張する[7]。

これに対して、 Aebischerは、史書を幾度も読み返し得た知識人が「事件」に尚も興味を持ち続けたことを―― Aebischer自身は明確に言及しないが、先の史実の検討の結論、つまり「事件」が単なる殿軍の崩壊ではなく、ガスコン人たちの国家的規模の反乱であったとする結論と、これは結び付けられるべきであろう――、L'Astronome の史書は示しているだけであって、そこに殊更に民間伝承の影響を見る必要性はないと反論する。

確かに、 L'Astronomeが文字を読めない人々までを対象に、vulgata の語を用いているという証拠は何もない。しかし、だからといって、「事件」を歌う何らかの「詩」がなかったことを積極的に証明する証拠とも、これはなり得ないのである。Aebischer は以下のように言い得ただけである。「従って《民衆詩<chant populaire>》が、ロンスヴォーで戦ったものたちのフランスへの帰還直後から発生していたと仮定せねばならない如何なる理由もない[8]。」 しかし、そう仮定してはならない如何なる理由もないのである。

これ以上例を積み重ねる必要はあるまい。結局は Aebischerと Pidalの主張は真に対立しえない。 Aebischerの反論は Pidalの主張に、部分的に異議を唱えるものの、それを否定し自らの主張――「事件」と０本の間に「民衆詩」の介在はなかったという主張を支持しえるわけではない[9]。

三番目の対立点――０本の起源問題――は、本考察の要であるので、章を改めて検討することとする。

Ⅲ．両論文によるオックスフォード本『ロラン』の起源

既に述べたように、 Pidalは０本『ロラン』が「事件」とほぼ同時に成立した、「時事詩」に直接の起源を持ち、フランク人の叙事詩伝承の流れの中にあることを主張している[10]。ここではこの「叙事詩伝承の流れの中にある」ことの意味が問題となるが、それには一つの価値転換が連座する。即ち、一般に「改作」とは古い均整のとれた作品を劣化させる悪しき作用と見做されるが、 Pidalによれば、「改作」こそが様々の異本を競合させることで作品を彫琢する、謂わば「伝承詩の生命」である[11]。彼は、残存する『ロラン』の諸異本の関係が、Théodor MüllerやEdmond Stengelの主張したようなステムマには還元され得ず、各異本の個々の部分に関してのみ系統樹を組み立てることができると主張する[12]。例えば、ガヌロンのロランへの挑戦のエピソード、マルガリスの役割などについては、０本に矛盾があり、V^4本の方に整合した原型を求めることができるが、十二人衆の埋葬に関しては０本の方が原型に近く、その他の異本がバリガン・エピソードと埋葬のエピソードとの整合の過程を示していると彼は言う[13]。更に、０本のバリガン、ブランカンドラン、ティエリとピナベルの決闘、ティエリに与えられたオジエの剣などのエピソードが、様々の矛盾をはらんでいることを指摘し、他の異本や Nota Emilianens などに従って、それらが原型に加筆された順序を Pidalは推定する[14]。

一方、 Aebischerは０本に先立つ「詩」のあったことは認めつつも、「事件」が初め詩の形でではなく、知識人の記憶として伝えられたと主張する。そして、そうした記憶が叙事詩の形態を取るに至ったのは十世紀のことであり、それが口承詩であったかエクリチュールに基づいたものであったかはわからないとも言う[15]。Aebischerは「序論」で結論を予告して、「オックスフォード本『ロラン』は、民衆の協働には何も負うところがない。［……］一人の偉大な詩人によって彫琢された、しかし同時に彼によって再彫琢されもした作品である[16]。」と言う。つまり、彼は『ロラン』が０本の作者の手を経ることで初めて「作品」足り得たと主張し、その根拠としてバリガン・エピソードの創出やガヌロン裁判の改変を挙げる。彼によれば、「ロンスヴォー」「バリガン」「ガヌロン裁判」という連鎖は、論理的かつ必然的である[17]。それは、ガヌロンとロランという二人の気高い臣下の私闘を描くと共に、臣下の義務履行としてのロランとマルシルの戦い、君主の義務履行としてのシャルルとバリガンの争いを描くという構造を持っている[18]。それ故、０本の作者は確かにロラン伝承に多くを負っているが、彼こそが自らの精神、才能に従って、1)君主－臣下の義務、2)臣下－君主の義務、3)共通の君主を脅かさない限りにおいてでしか正当でない臣下間の私闘という要素を『ロラン』に導入して一つの「作品」を生み出したのだと、Aebischer は結論付ける[19]。

Ⅳ. 結論 —— 「美学的判断」と「一貫性」の神話

両者の主張の決定的根拠は、史実の検討、諸史料の検討によっては示されていない。 Aebischerの論の展開において決定的に欠如しているのは、O本の「作品」足りえる根拠ではなく、そうした「根拠」が、一人の詩人に帰される根拠である。つまり、O本の「詩人」がバリガン・エピソードを一から創出し、ガヌロンの裁判に全く新しい本質を与えたという判断までもが、「一貫性」に従って行われてしまっており、それ以外の根拠をAebischer が示し得ないという点こそが問題なのである。無論Pidal も批判を免れ得ない。両者の論の共通性は、「詩の《起源》の局面にのみその注意を注ぐために、個人の介入及び詩の美的局面を蔑ろにするわけではなく、それを不問に帰すに至ったことを認めなくてはならない[20]」という Pidalの言葉に、Aebischer の主張が矛盾しない点にあるのではなくて、上のように言うPidal 自身が、Aebischerの「美学的判断」の基準たる「一貫性」に基づいて、バリガン・エピソードを加筆と認定したり、矛盾の排除を以て原型<archétype> の再現、及び異本間の関係の推定等を行ってしまう点にある[21]。それ故、こうした「一貫性」が常に現代的な視点からしか捉えられ得ないということにともに無反省であるという点で、両者は共通の問題を抱えていると言わねばならないのである。

【註】

1) 武勲詩の起源を扱う諸主張を整理し、その簡略な一覧表を作成することが本論考の本来の目的であったし、その観点から第一部(*JLLMF* N°1) は述べられている。そしてその第二部たる本稿は、Menéndez PidalとPaul Aebischerの主張にあてられる筈であった。その目的が完全に放棄される訳ではないにせよ、それ以外の目的が生じてきたことをつけ加えておかねばならない。

2) 紙幅の関係上参考文献一覧表を付することができない。「『ロランの歌』と〈一貫性〉の神話」(*LMJECE* 21号、大阪市立大学フランス文学会発行)の一覧表を参照されたい。

3) 例えば『叙事詩伝承』が僅か一頁余りで触れている(pp.286-287)Rodlanの名の刻まれたドゥニエ貨幣について、『先史と原史』は17頁 (pp.127-143)を割いて、これを様々の可能性から検討している。

4) Cf. M. Pidal, op.cit. ChapitreVI L'Evénement Historique (pp.181-230, surtout pp. 205-209) [なお、史料については同書の Appendice Historiographique(pp.519-532) を参照] ; P. Aebischer, op.cit. I.- 2(pp.13-92, surtout pp. 61-67, pp. 75-88 [両箇所において、AebischerはPidal への反論を行っている])

その他史実については、以下の著述等が概観している。

Les Chansons de geste françaises (Martín des Riquer, traduction française d'I. Cluzel, Nizet, Paris, 1957, pp.13-21)

La Chanson de Roland ≪*Connaissance des Lettres*≫
(Pierre Le Gentil, Hatier, Paris, 1965, pp.15-21)

5) Cf. M. Pidal, op.cit. pp.283-291
6) Cf. P. Aebischer, op.cit. pp.98-111, 143-145
7) Cf. M. Pidal, op.cit. pp.291-295
8) Cf. P. Aebischer, op.cit. pp.149-150
9) つまりは、Aebischer が以下のように言いえる根拠はない。
「ロンスヴォーの負傷者達がサンージャンーピエードーポールか何処かでその傷に手当てをしていた時点から詩的作業が始まり、三百年以上もの間継続されて、O本『ロラン』の成立に至ったと証明すべく、前代未聞のそして認めてしまうならば、虚しい努力をせねばならないメネンデス・ピダルの研究に比して、私の立場は気楽なものである。というのも私の仮説を補強するためには、繰り返すが、スペイン遠征がそれが行われた後数世紀の間語り継がれ、その間に人々の語る内容が徐々にその歴史性を失って、神話の傾向を深めて行ったということを証明するだけで良いからである」(ibid. p.148)
上のAebischer の言葉においては、自説を確証する為には、Pidal と同等の、つまりはO本と「事件」の間に「伝承詩」の介在がなかったことを証明せねばならないという当然の論理が無視されてしまっているのである。
10) Cf. M. Pidal, op.cit. Chapitre XI ≪Principes Fondamentaux du Traditionalisme Moderne≫ (pp.451-517, surtout pp.491-495)
11) Cf. ibid. Chapitre II ≪Une poème qui vit de variantes≫ (pp.51-82)
[殊に、pp. 52-56 は「伝承詩」への個人の関与が、民主主義の投票制度への個人の関与と共通性を持つこと、pp.69-71は武勲詩が基本的に口承詩であり、エクリチュールに定着されることの方が稀であったということを、それぞれ述べて、「現代伝承主義」の独自性を提示している点で重要である]
12) Cf. ibid. pp.85-89 [周知のとおり、StengelはO本ーV⁴本、K本、その他の異本の三系統に、MüllerはO本とその他の異本の二系統にそれぞれ諸写本を分類している。後者のステムマに従って、ベディエはO本が、他の写本全てを合わせた以上の正当性<authanticité>を持つと主張する]
13) Cf. ibid. pp.89-120
14) Cf. ibid. Chapitre IV ≪Par delà les textes conservés≫(pp.121-146)
15) Cf. P. Aebischer, pp.145-162
16) ibid. p.8
17) Cf. ibid. pp.258-259
18) Cf. ibid. pp.260-267,「『ロランの歌』と〈一貫性〉の神話」(前掲書、註5)
[ガヌロンを、気高い騎士と見ようとする研究家としては、他にMartín de Riquerがいる。(Cf. *Les Chansons de Geste Franéaise* ,pp.96-98)]
19) Cf. ibid. p.268- 273
20) M. Pidal. op.cit. p.56
21) Pidal の諸判断が如何に「美学的」判断に近いかについては、『ロラン』が余分な歯車(バリガン・エピソード)のために狂っている振り子時計であるという表現を、Bédierの言葉にかけて用いていることからもわかる。(op.cit. p.497)